

論文審査の結果の要旨

氏名：金井 尊史

博士の専攻分野の名称：博士（国際関係）

論文題名：「ソ連版電撃戦」の嚆矢としてのノモンハン事件

審査委員：（主査） 教授 吉本 隆 昭

（副査） 講師 黒川 祐 次

防衛大学校防衛学教育学群教授 坂口 大作

1 本論文の目的および意義

本論文は、1939年5月から8月までの間、満州国とモンゴルとの国境で発生した当初は満州国軍とモンゴル軍との、爾後関東軍とソ連軍との本格的な武力衝突となったノモンハン事件を、ソ連側一次史料を分析して再検証したものである。ノモンハン事件の研究は、すでに戦前期から行われ、膨大な研究成果が蓄積されているが、そのほとんどが日本側からの史料、情報に基づく国境紛争の拡大、発展した事件として捉えたものであり、ここ数十年、この研究に大きな進展は見られなかった。しかしながら、冷戦の終結とソ連邦の崩壊によって、当時のソ連軍の一次史料の利用が可能となり、ノモンハン事件研究は次の段階へ進むことになった。そこで本論文は、ソ連側の一次史料の分析に基づき、ソ連邦にとってノモンハン事件は単なる国境紛争の拡大したものではなく、特にG・K・ジューコフ将軍が指揮したソ連軍による8月攻勢は、ソ連邦成立後、トハチェフスキー元帥らによって確立された「ソ連版電撃戦」の初めての戦場での実証ではなかったのか、という新しい仮説、知見を提示している。

ソ連版電撃戦とは、ドイツ軍の電撃戦理論を基礎に、航空部隊と砲兵の支援の下、戦車部隊を主力とした諸兵科連合機械化部隊を敵に対して圧倒的に優勢な規模で投入して連続攻撃を行い、敵の対応能力を上回る規模と速度で迅速に包囲殲滅を図るという、ソ連軍が「縦深作戦理論」と呼んだ独自の作戦戦略である。

1939年9月、ノモンハン事件直後に行われたソ連軍の東ポーランドへの侵攻はソ連版電撃戦であったと主張する論文、著作は、すでにロシア、欧米で出ているが、ノモンハン事件を最初のソ連版電撃戦であったという主張はまだ現れていない。そこで、これを証明できれば、ノモンハン事件研究に新たな知見を切り開くことになり、ノモンハン事件研究の発展に大きく貢献するのみならず、第二次世界大戦末期にソ連軍がドイツに対して行った大規模なソ連版電撃戦、更に冷戦期にソ連がNATOに対して採用していた全縦深同時打撃の縦深作戦理論の始まりは、ソ連軍の東ポーランドへの侵攻ではなく、実はその1ヶ月前に行われたノモンハン事件での8月攻勢であったと初めて証明することになり、その学問的意義は極めて大きい。

2 本論文の対象および研究方法

本論文の対象は、期間は、中心となるのは1939年5月のノモンハン事件の開始から同年8月末のソ連軍の8月攻勢の終了までであるが、電撃戦理論の成立の論証の必要から、1914年の第一次世界大戦の開始まで遡って論述されている。対象とする事象は、ドイツで成立した電撃戦理論、独ソ協力によるソ連版電撃戦理論の成立、ノモンハン事件に至るソ満国境紛争、1939年5月から7月に至るノモンハン事件の戦闘、及びソ連軍の8月攻勢である。対象とする地域は、主として、満州国とモンゴル人民共和国の国境地帯、特にハルハ河兩岸地域である。

本論文作成に使用した一次史料は、モスクワのロシア国立軍事公文書館（P T B A）所蔵のソ連軍前線軍集団（シュテルン）、及び第1集団軍（ジューコフ）報告、作戦部隊の作戦日誌、及び軍事行動記録である。前線軍集団、及び第1集団軍報告は、2007年に防衛省防衛研究所戦史部が部内資料として配布した『ノモンハン事件関連史料集』に邦訳が掲載されているが、ソ連軍作戦部隊の作戦日誌、及び軍事行動記録は、日本では未公開である。本論文の中核をなすソ連軍の8月攻勢の論証には、主として、このソ連軍作戦文書を使用している。

本論文作成の基礎をなす研究法は、まずソ連版電撃戦理論を明らかにして、それを基にノモンハン事件のソ連軍の8月を分析して、その理論の適用であったことを証明している。すなわち前者は、演繹法による戦略研究の手法であり、後者は一次史料を駆使した帰納法による軍事史研究の手法である。つまり本論文は、演繹法と帰納法を併用して、戦略と軍事史の研究を巧みに融合させた独創的な研究方法による。

3 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

I 序論

II 本論

第1章 電撃戦理論

第1節 電撃戦とは何か

第2節 電撃戦理論の誕生

第3節 ドイツの電撃戦

第2章 ソ連版電撃戦

第1節 独ソの軍事協力

第2節 『1936年赤軍野外教令』

第3節 機動戦に関するジューコフの認識

第4節 ポーランド東部への侵攻

第3章 ソ満国境紛争

第1節 満州国の建国と国境問題

第2節 国境紛争

第3節 張鼓峯事件

第4章 ノモンハン事件（1）

第1節 5月の戦闘

第2節 7月の戦闘

第3節 第1集団軍と戦線軍集団の編成

第5章 ノモンハン事件（2）

第1節 作戦計画の策定

第2節 作戦準備

第3節 戦闘経過

III 結論

註

史料

参考文献

4 本論文の概要

本論文は、I序論とIII結論の間に本論の五つの章、15の節で構成されている。序論で論文の意義及び問題の所在、先行研究、史料及び研究法、論文の構成を説明した上で、第1章では、この論文の論証の大前提となる電撃戦とはいかなる理論で、どのように成立し、ドイツがそれを実戦でいかに駆使したかを説明している。第2章では、その電撃戦理論が、いかにしてソ連に伝わり、どのような経過を経てソ連版電撃戦理論が成立し、その特質は何かを明らかにして、ノモンハン事件で指揮官になったジューコフが、それをどう認識していたかを論じ、さらにノモンハン事件直後、ソ連軍が行った東ポーランド侵攻が実はソ連版電撃戦の実行であったことを証明して、その直前に勃発したノモンハン事件でのソ連軍の大攻勢（8月攻勢）は、どうであったのかという論を展開している。しかしそれを論じる前に、第3章でノモンハン事件に至るソ連・満州国間で生じた国境紛争の実態を明らかにしている。第4章でその国境紛争が拡大、激化した1939年5月から7月までの戦闘を明らかにした上で、第5章でソ連軍の8月の大攻勢が、それまでとは一線を画する周到かつ大規模に計画、実行された攻勢作戦であったことを、一次史料を使って

詳細に論証している。結論では、本論での論証を基に、戦略理論と実際の作戦行動を詳細に照らし合わせて、ソ連軍の8月攻勢がソ連版電撃戦理論の実戦での初めての実証であったことを証明している。

5 本論文に対する所見

本論文は、ソ連軍文書（一次史料）を駆使して、1939年のノモンハン事件が今までの定説である国境紛争が拡大、激化した戦争ではなく、ソ連軍が周到に計画、準備したソ連版電撃戦理論を実戦に適用した新しいタイプの戦争の嚆矢であったことを証明するものである。

本論文の意義は、第一に、従来利用不可能であったロシア国立軍事公文書館所蔵のソ連軍一次史料を使って従来の定説を覆す仮説を証明し、我が国ではここ数十年停滞していたノモンハン事件研究に風穴を開けたことである。これを契機に今後我が国でのノモンハン事件は大いに進展すると思われる。

第二は、冷戦時NATO正面で最大の脅威であったソ連軍の全縦深同時打撃、無停止攻撃による縦深作戦戦略（ソ連版電撃戦理論）の起源が極東のソ満国境で勃発したノモンハン事件であったことを世界で初めて証明したことにより、今後のロシア・ソ連の軍事戦略理論研究の深化、発展に貢献すると思われる。

第三は、この論文作成で使った研究法は、演繹法による戦略研究と帰納法による軍事史研究を巧みに融合させたユニークなものであり、今後の軍事研究に新しい知見と新機軸を提供するものである。

ただ本論文では、第5章での戦闘経過の分析に際して、ソ連軍文書の活用がまだ不十分であり、またソ連版電撃戦理論の成立過程の論理展開での説明もやや不十分、またノモンハン事件で、なぜ電撃戦理論の適用が可能であったのかという課題とスターリンによる肅清との関係の解明がまだ不十分である。

しかしながら、本論文には、以上のように今後さらに研究を進めて解明すべき点はあるものの、ロシア所在の新史料の使用、数十年変わることのなかった定説を覆す画期的な仮説の提示と証明、演繹法と帰納法を融合させたユニークな研究法の開拓等、その独創性と実証性は高く評価できるものであり、今後の当該分野の研究の進展に大きく寄与するものと考えられる。

よって本論文は、博士（国際関係）の学位を授与されるのに値するものと認められる。

以 上

平成30年1月15日